

【ねがいましては】

令和元年9月25日

KYOWA SCHOOL

第347号

「資源」

ある日の新聞に経済学についての説明が載っていました。自身経済学部出身でありながら、その主旨を把握していなかったことに冷や汗が出ました。

経済学の語源は、「世を治め、民を救う」という意味なのだそうです。現代風に訳すと「私たちがうまく生活できるようにする」ことだそうです。経済学はそのための方法を探る学問ということになります。大きなテーマとしては、限られた「資源」をどう無駄なく使うかということがあるそうです。

「資源」、とかく思われがちなのは、天然資源、石油や石炭など化石燃料が浮かびますが、経済学でいうところの資源には「お金・時間・労働力・生産設備」なども含まれるそうです。

私の中で気になったのが、「時間」です。

石油を中身濃く使うことは、省エネとして解釈できます。いかに少ない量の石油で今までにない大量のエネルギーを作り出せるか……。これは私たちがうまく生活できる方法のひとつになります。では、時間……。時間をいかに少なくして効率の良い結果を生み出せるか？ 製品を作り出す現場では、ロボットなどを多用しながら短時間で大量の製品を作り出すことになりそうです。

で、人の中にある「時間」という資源、しかも子どもたちにその時間を当てはめてみるとどうなのか……。非常に難しいことがわかってきました。「私たちがうまく生活できるようにする」という経済学の中の「時間」という資源。

「うまく」という語彙の解釈が個人差となって現れると思います。ある方は、いかに短時間でテスト範囲を記憶するか。ある方は、いかに短時間で感動を覚えるか。などなど、子どもたちに当てはめてみると、前者が過半数を占めてしまいがちかも。学校→テスト→成績という流れは、好成绩を取っての感動以外にはなかなか後者の範囲に入れそうにありません。

幼少時、むさぼるようにして読みふけた絵本。次はどんな物語なのだろう。次はどのような世界が広がっているのだろう。このような時間「資源」の使い方が、子にとっては最も相応しい資源のあり方だと思います。そして、小学校へ行き、活字だけの世界へ旅立ったとしても、けっして変化のない時間「資源の使い方」がつづく……。

今では、スマホやPCで検索を重ねていくと、やがて検索した内容に属したものが数多く現れるようになります。個人が検索したデータをビッグデータとして管理・完成されたAIが、惜しげもなく次へ次へと候補を掲げてきます。例えば、私が車に興味を抱いているとして、車関連の検索を多く試みていると、やがて頼んでもいないのに車にちなんだ内容の広告などが数多く見られるようになります。ネコの餌に関心を持ち、餌探しをしているうちに、結構な割合でネコ餌の広告が多く現れるようになります。すごい技術です。私ひとりのために広告が入れ替わっていく……。個性ある表示になっていく……。

そうすると、自分が興味を持っている分野にばかり、さらに突き進むことになるのですが、これでは「奇抜な出会い」が乏しくなってしまう。少年時代あった突然の「出会い」……。これこそ貴重な「資源」の始まりの瞬間。

ぜひ、図書館や本屋さんへ出かけられることをお勧めいたします。「私たちがうまく生活できるようにする」きっかけがひそんでいるように思います。

さらに新聞内にはこうあります。「市場が大きくなるほど分業が発達する。すると生産性は向上するが、人は限られた部分のみを見る事になり、考えるという世界が狭くなってしまふ。つまり、分業は人を愚かにしてしまう」……。と。

いかにもその通り、これを今の学校に置き換えてみると、極端ではありますが、ある教科ばかり取り組んでいると、その他の教科との関連づけが乏しくなり、本来の学びから遠く危険が広がってしまう。

そこで見えてきたもの。これは難しいことだと思いますが、ある社会科での授業で、資源ゴミについての学習をしたとします。まずはゴミっていつ頃からどのようなものがスタートだったのか。これは歴史になりそうです。ゴミの種類や、それがどの分野の資源に活用できるのか。これは科学的な見地に立てば、理科なのかも。そして再利用されたとして、どのくらいのコストがかかり、再三は合うのか……。これは数学科かもしれません。そして資源ゴミの回収率を高めるためのキャッチコピーを考える。これは国語になるのでしょうか。ついでに、外国人向けへのキャッチコピーへと変換しておく。もちろん英語で。

ひとつの学習がすべてに広がる。理想なのでしょうね。こうなると問題が生じます。どの教科でのテストにするか。そうなのです。テストがなければ、または教科を限定するのではなく、総合的な教科として行うのが良いのかもしれませんが。私たちはあまりにも教科慣れしてしまっているようです。学校へ初めて行ったときから、国語・算数・理科・社会でしたので……。そうすれば入口が広い見地からになりますので、あとはそれに関連した興味へと各自の個性が表れてくるわけで、子どもたちの取り組みも意欲的になるかもしれません。

さて皆さん。教科に縛られることなく、自由な疑問をたくさん作って、自由に探ってみてはいかがでしょうか。